□ 作品紹介 □

一、春木光平

臨書　楷書　欧陽詢『皇甫誕碑』　半切

「顧激清風於後葉抗名節於當時者見之弘義明公諱誕字玄憲安定朝那人」

書道部に入ってやっと最初の一歩が踏み出せました。綺麗な字に憧れて楷書に挑戦しました。

二、小川薫

臨書　行書　王羲之『喪乱帖』　半切

「羲之頓首。喪亂之極。先墓再離荼」

書道は大学に入って始めたので、作品を書展に出すのは今回が初です。臨書の難しさと楽しさを味わうことができました。

三、江崎洋平

臨書　行書　趙孟頫『前後赤壁賦』　半切四連

「不知其所止飄々乎如遺世獨立羽化而登
仙於是飲酒楽甚扣舷而歌之歌曰桂棹
兮蘭槳擊空明兮遡流光緞渺々兮余懐
望美人兮天一方客有吹洞簫者倚」

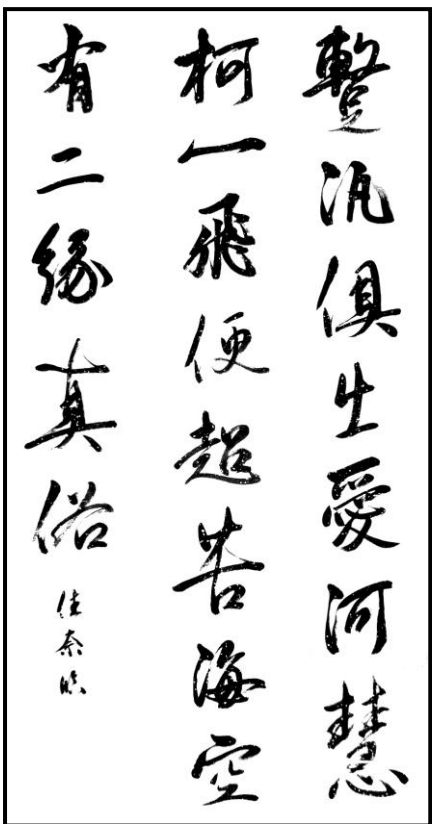
趙孟頫が仕えた元朝では中国伝統文化が軽視され、「書」も価値が認められていませんでした。そんな時代に彼は先人の書を学び、育んでいこうとしたそうです。彼が後世に受け継ごうとした書のすばらしさを少しでも学びたいと思い、今回挑戦してみました。まだまだな点もありますが、自分なりに納得のいく作品に仕上がったと思います。

四、梅野　佳奈

臨書　行書　橘逸勢『伊都内親王願文』　全紙

「暫汎俱出愛河慧柯一飛便超苦海空有二縁真俗」

躍動感あふれる感じが素敵だなと思い挑戦しました。が、予想よりはるかに難しくて、かなり苦戦しました。



五、肥後　真

臨書　行書　黄庭堅『致景道十七使君』　半切

「方為兒童嬉戲今頎然在朝班思公壽景玲不得見毎見景道尚有典刑宣州院諸公多學」

黄庭堅独特のバランス感覚を意識して制作しました。独特すぎて表現しきれなかった部分も多々ありますが、字の重点をずらすことなど今までにない感覚を味わえました。

六、小島千明

臨書　楷書　『尉遲為牛橛造像記』　全紙

「妙樂自在之処若有苦累即解脱三」

締め切り直前になって書く文字を変更したため、練習不足のままの出品となってしまいました。悔いは残りますが、いい勉強になったと思います。

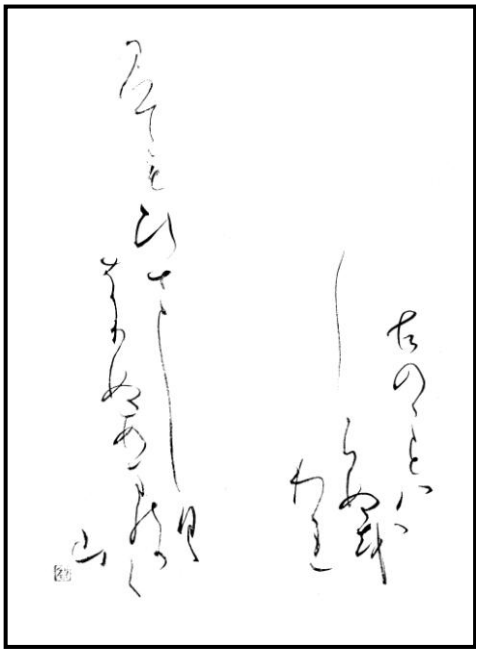
七、松永智子

創作　かな　『積日累久』　半切

「古のことは知らぬをわれ見ても　久しくなりぬ天の香具山」

（詠み人しらず『万葉集』第七巻　一〇九六）

歌の大意は、「いにしえの伝説は知らないけれど、私が見てからも久しいものになったなぁ。天の香具山は。」というものです。悠久の自然を、自分の生きた時間で感じ取る気持ちが表れています。京都に来て四年目。大文字山を思いながら書きました。



八、竹倉功祐

創作　調和体

BUMP OF CHICKEN『ノーヒットノーラン』　半切

臆病なくせに強がりで、必死に周囲の期待に応えようとする、ノーヒットノーランの打者が主役の歌です。自身のダメなところを理解しつつも、それに向き合い、果敢に挑戦し続けようとするスラッガー。自分も少しでもそんな人間に近付けたら……と思い、この歌を作品にしてみました。

九、木谷亮太

臨書　行書　米芾『米芾集』　半切

「余収張季明帖之秋気深不審気力」

今回が初めての出品です。書道に関しての知識や経験、力が全然なくて拙い作品になっております。自分の無力さを痛感したわけですが、これをきっかけとしてより一層精進したいと思っています。

十、久田喜朗

臨書　草書　王鐸『詩巻二種』　半切

「沖虚風在御。人影近漁扉。頓悟烟奚泊。斯」

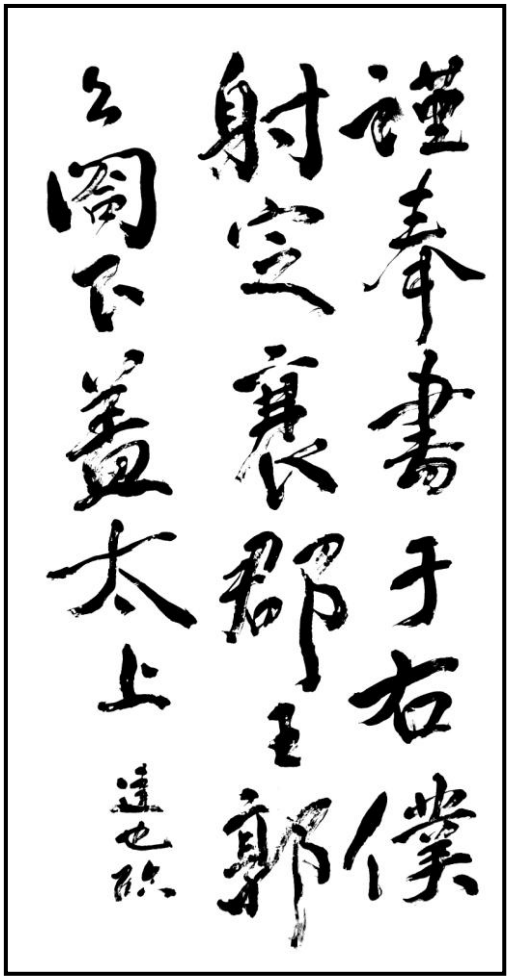
王鐸らしい丸みを帯びた線を出しつつ、全体のバランスを取るのに苦労しました。

十一、上原達也

臨書　行書　顔真卿『争坐位稿』　全紙

「謹奉書于右僕射定襄郡王郭公閣下。蓋太上」

高校生の頃より慣れ親しんできた作品です。目指す所に少し近付けたようで、それと同時に未だ果てしなく遠い距離を感じます。一生このまま歩み続けるのも、案外悪くないかもしれません。

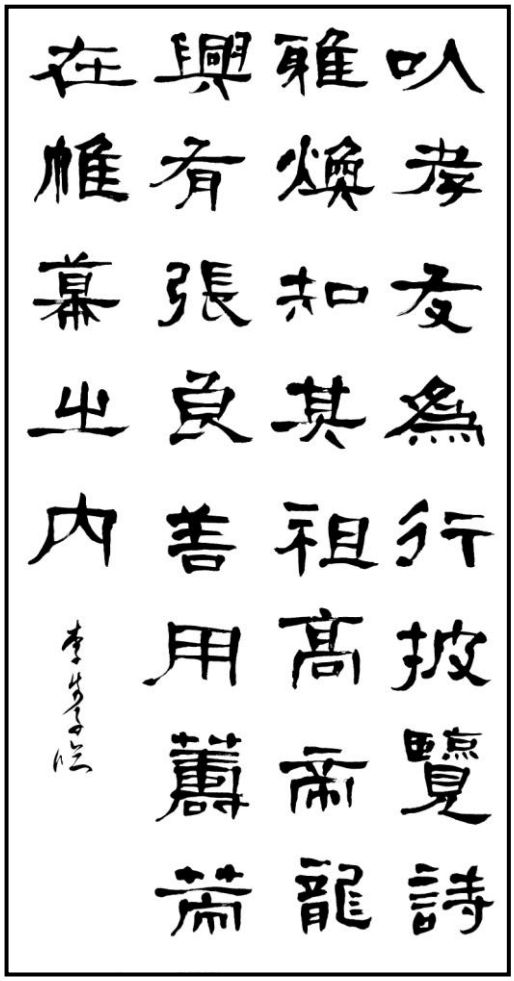


十二、頓部李歩子

臨書　隷書　何紹基『臨張遷碑』　全紙

「以孝友爲行披覧詩雅煥知其祖高帝龍興有張良善用籌策在帷幕之内」

以前から書いてみたかった隷書に初挑戦です。まさかの右下がりや作品のまとめ方に苦労しました。山本さんと行った故宮博物館では念願の王羲之などは見られませんでしたが、隷書コレクションを見ることができ、勉強になりました。



一三、西原英臣

臨書　草書　傅山『揮散一觴』　３尺×６尺

「揮散一觴　陶然自楽」

今回も傅山の臨書に挑戦しました。作品の意味は「お酒を飲んで心も体も喜びに満ち溢れている」という意味です。自分としては傅山の新しい境地を垣間見た作品だったので、今回書いてみました。

一四、岡本清二

創作　調和体　『氣心腹人己』　半切

「気は長く心は丸く腹たてず人は大きく己小さく」

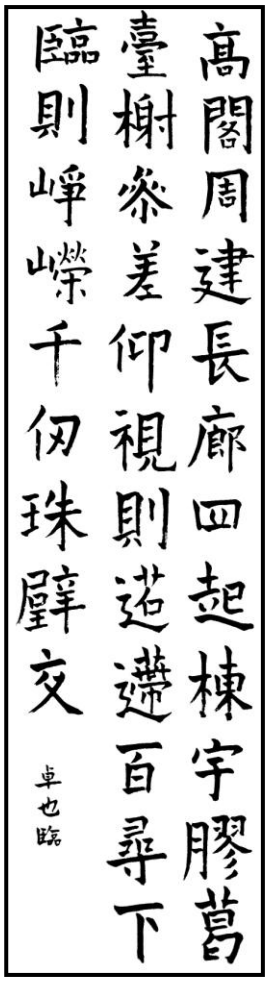
高校のとき目にした言葉で、達磨禅僧の教えだそうです。書道は初の挑戦です。自分なりに気持ちをこめて書いてみましたが、なかなか思うようにかけず大変でした。

一五、和田卓也

臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切

「高閣周り建ち、長廊四に起こり、棟宇膠葛として、台榭参差たり。仰ぎ視れば則ち　遰たること百尋、下に臨めば則ち崢嶸たること千仞。珠壁交」

情景描写のシーンなので壮大さの表現を意識しました。それでいて九成宮の端正さや流れを意識しました。九成宮に含まれる基礎的でありながら本質的な楷書の技法は非常にためになりました。

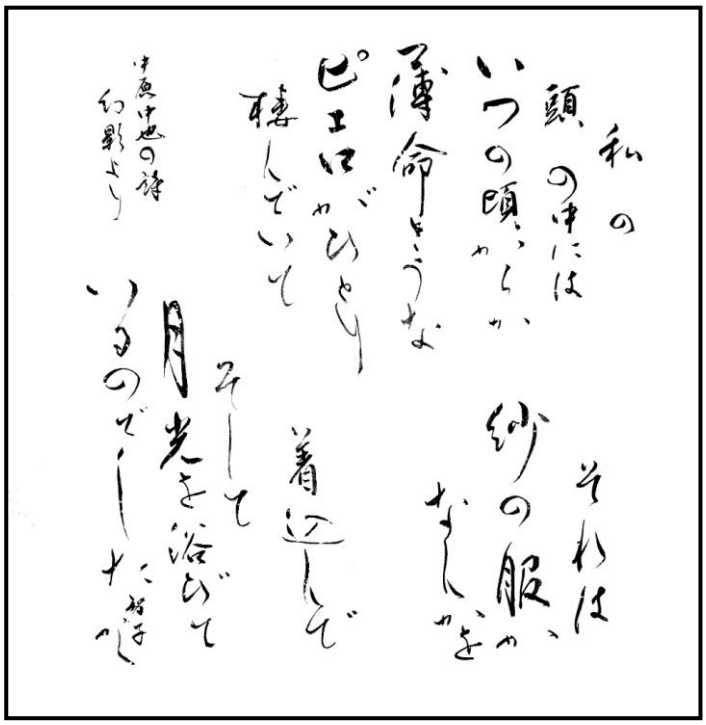


一六、松永智子

創作　調和体　『幻影』　全紙１／２

「私の頭の中には、いつの頃からか、薄命さうなピエロがひとり棲んでゐて、それは、紗の服なんかを着込んで、そして、月光を浴びてゐるのでした。」中原中也の詩『幻影』より

大学でもう一度書道を始めたのも、好きな詩を味わいたいという思いからでした。まっさらな紙に描く文字が、詩になってゆく　―まるで、音が音楽に成るこのプロセスが、私の書の楽しみです。そしてその表現で何かを伝えることができたなら、幸せです。



一七、河合直樹

創作　草書　『雄飛』　全紙

毎度恒例の青淡墨の大字書ですが、今回は本懐である二字書に挑戦しました。一般に、空間のとりかたや墨の濃淡の関係から、一字書に比して二字書は難しいとされていますが、まさにその通りでした。雄々しく飛び立つ様を感じていただければ幸いです。